

日本昆虫学史話 (2)

江崎 悌三
九州大学農学部昆虫学教室

2. 蝶行脚奥の細道

アマチュアの昆虫家はいつの時代でも甲蟲屋と蝶取りが相半ばしている、いや後者の方が寧ろ多いのが一般である。御雇外国人教師の中にも蝶好きの人があつたのは当然である。明治6年11月に開成学校から分れて外国語学校が出来た。その中の英語学科の先生にイギリスから招かれた **Montague Arthur Fenton** という人があつた。明治初年の学制の変転は最近終戦後の学制改変などよりもつと激しかつたので、それをはずきり捕えて行くのはなかなか難かしいが、またその頃の先生の中には、外国人でも随分いかがわしいのがいて、学力も人格も酷いのがあつた中に、この Fenton は実に立派な紳士で、多くの生徒に敬慕されていた。この英語学科は東京英語学校、さらに開成学校予科となり、明治10年に開成学校と東京医学校とが合併して東京大学となつたとき、この予科が東京大学予備門となつたもので、Fenton は明治7年に来朝し、そこで明治13年4月まで英語の教師をしていて、その教えを受けたものの中に、後に明治の学界をリードした碩学となつた人がたくさんあつた。

1874年(明治7年)3月にこの英語学校に入学したものの中に、田中館愛橋、石川千代松、藤沢利器太郎などがあつた。この年の7月に Fenton が来任し、教授を始めると共に趣味として蝶の採集を始めた。彼の所へ出入りしてその助手となつて蝶の採集を手伝つたりしたのは田中館が最初で、その次の1875年の夏には Fenton と一緒に採集旅行をして歩いた。先ず甲州街道から甲斐に出て、富士山に登り、また戻つて会津から越後路を歩いた。⁶⁾

石川はその頃巢鴨に住んでいて、当時はその辺は好採集地であつたから、家の附近で盛に蝶を集めていた。1876年の夏休み前のある日、Fenton に招かれてその住居へ遊びに行つた。そこで発見したものはたくさんの蝶蛾の標本であつた。そしてその標本には一つ一つ学名がついているのに先ず驚いた。そこで石川は“自分も蝶が好きで一生懸命集めている”と話した。今度は Fenton が驚いた。それから話が進んで、“自分に一つ考えがあるが、どうだろうか、自分は夏休みには方々へ蝶を集めに行く、その都度通辯を備つて行くが、通辯の中にはなかなか悪い奴がいて困る事が多い。君が蝶々が好きならば自分と一緒に行かないか。旅費は無論自分が出すが、それでも通辯を備うよりは安い。その上同じ種類のものを5疋捕つたら、1疋か2疋君にやる”ということで、早速約束が出来上つた。その翌日石川は自分の collecton を携えて再び Fenton を訪れ、標本に名前をつけた。その中に Fenton のもつていない種類が一つあつた。Fenton から “この蝶は珍しいから

6) 田中館愛橋、石川千代松君の思ひ出、科学 5 (4): 166—167, 1935.

Butler へ送りたいが、僅かに1足では君も手放すのは嫌だろうから、君は一つこの蝶を写生してくれ、その間にまた本物が捕れたら送るように”と言われ、石川は早速1日で写生を仕上げ、Fenton へ渡した。

この夏の Fenton の“奥の細道”への蝶採集行は日本蝶学史上重要な成果を挙げたばかりでなく、その膝栗毛的旅行それ自身が興味津々たるものであつた。明治9年⁷⁾の頃には東京から北に汽車はなかつた。少し田舎へ行けばまだ江戸時代と大して変りはなかつた。その頃の環境を想像しながら読んで頂き度い。

1876年7月初、それは多分暑い日であつたろう。Fenton の一行は東京を出発した。同行は石川千代松と田中館愛橋の2人であつた。初日は大した採集地もないので、先ず宇都宮行の馬車に投じた。その頃の馬車は3人或は4人位づつ向い合つて坐るもので、粗末で窮屈な上に車輪はもちろん鉄輪であつた。発著所は浅草で、それから奥羽街道を千住、草加、越ヶ谷、粕壁と北へ進み、その日一行は宇都宮の手前の宿場、雀の宮で泊つた。次の日は日光まで行つたようである。このどちらかの宿でその主人が石川を通辯と思ひ“異人さんの宿賃は3円か5円とつてくれ、その代りお前に1円やる”と言われて、石川は先ず腹を立てた。宇都宮からいよいよ奥州路へかかるのであるが、ここからは馬を備つて、それに荷物を乗せ、一行は綱を手にして歩いて行つた。

宇都宮から北へ進んで行くと2里位で鬼怒川を渡る。この阿久津の河原で小さなみずばらしいシジミチョウを採つた。Fenton の炯眼は後にこれを新種と断定し *Lycaena alope* と名付けたもので、これこそ後のヒメシジミ、今日シルヴィアシジミと一般に言われているものだつたのである。

いよいよ磐城へ入つて白河に着いた。ここで田中館は一行と別れて奥羽街道を郷里福岡へと直行し、そこで Fenton と石川を待ち合わせる事になつた。ここで先ず大失敗が演じられた。Fenton は汗に滲んだ白いシャツを洗濯させた。そのポケットには旅行中なくてはならない旅行免状が入つていたが、それを出すのを忘れたために、ボロボロになつて了つた。これにはすっかり凹たれたが、やむを得ず白河の警察署の諒解を得て、急便を出して東京のイギリス公使館から新しい旅行免状を取寄せた。その間5~6日かかつたのであるが、白河の附近だけで採集をすることを許して貰つた。やつと免状が届いたので次は奥羽街道から分れて北へ進み、猪苗代湖へ向つた。湖の南岸舟津について、翌朝舟で対岸の猪苗代の村へ渡ることにして、乗船した所が途中から急に強風が吹き出し、東岸の村で風のやむのを待つたりして、日暮方にやつと猪苗代についた。

翌日は猪苗代から磐梯山へ登るつもりであつたが、御山へ登るのには二三日前から肉食を絶ち、身を清めなければならぬ掟があるというので、宿のものが承知しない。それで

7) 石川がしばしば書いている懐旧談の中にこの旅行は“明治7年頃”となつていゝものが多いが、これは確かに彼の記憶の誤で、明治9年であつたことは他の資料から完全に傍証出来る。石川の懐旧談の代表的なものとしては、“老科学者の手記”(石川千代松全集 4, 1936)及び“石川千代松博士は科学生活六十年を語る”科学画報 21(4): 505—516, 1933 を挙げておく。



第3図 Montague Arthur Fenton
(田中館よりとる)

警察の巡査と小学校の校長の助けを得てやつと説き伏せて、案内者を1人頼むことが出来た。翌日早朝から出掛けて、もう一息で頂上という所まで来て、一休みしたところ、石川が急に腹が痛み出した。実は舟津を出る頃から腹工合が悪かつたのである。驚いたのは案内人で、弁当もおいたまま逃げて下山して了つた、御山の祟りだというわけである。困つたのは2人で、石川は Fenton に負うて貰つて、やつと村へ戻つて来たが、こんどは“それ見たことか”と宿屋で入れて呉れない、それをまたまた巡査と校長に頼んでやつと二、三日泊めて貰い、石川が恢復するのを待つて更に北へ向つて出発した。檜原に一泊し、次の日石川は牛の背に乗つて、檜原峠を越え米沢に着いた。

檜原峠の採集はなかなか収穫が多かつた。ウラキンシジミとウラクロシジミはこのときに発見された新種である。前者は Butler によつて *Thecla ibara* と名付けられたが、この種名は檜原(ひば

ら)が Fenton によつて “Ibara” と記され、それをそのままとつたのであつた。

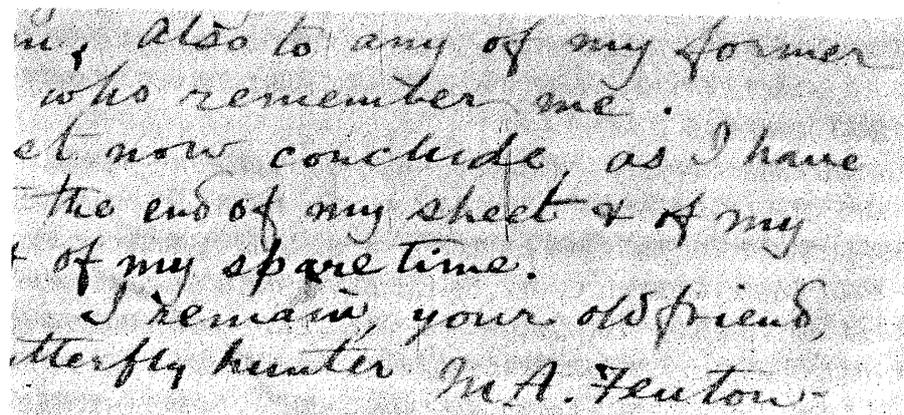
米沢から山形へ、次に道を左にとつて月山に登つた。次いで羽黒山⁸⁾から最上川へ下り、酒田に出た。酒田からは海岸に沿うて秋田まで行き、そこから中央山脈を横断して陸中盛岡への強行軍に出発した。刈和野、神宮寺から角館を経て、いよいよ峠に近い村に泊つた。その名は記録に残っていないが、多分生保内であつたろう。そこに美しい花屋があつて、夏のこととて室は開け放され、その裏に中二階のような西洋風の座敷があつて、珍らしくも椅子や机が並べてあつた。ここは大変居心地よく、Fenton もよく睡つた。翌朝宿賃を払おうとすると“いらぬ”という。主人にそのわけを聞くと“実は自分は子供の時から横浜へ出て商売をし、少々財産が出来たのでここへ引込んだ。そのときこの机や椅子をもつて来て、村のものにも異人さんの話をして聞かせたのであるが、村の人は一度も西洋人を見たことがない、そこへ昨夜おいでになつたので、皆を呼んで見せたのです”というわけで、昨夜どうも人の出入の多い家だと思つたわけも解つたが、さすがの Fenton も見せ物になつたと知つて苦笑した。仙台峠の手前には溪流の断崖を蜘蛛のように岩に噛りついて渡るような難所もあつた。盛岡を経て、陸奥福岡へ辿りついたのは8月1日で、東京を立つて殆んど1か月かかつた。途中旅行免状の事件や石川の病氣などで遅れたのである。

福岡では Fenton と石川とは田中館の家に客となつて、8月一杯を送つた。この間に町の東にある折爪岳へ上り、また十和田まで遠征した。その頃の十和田は恐ろしい山奥で、

8) 石川の手記(全集4:23)には月山から“鳥海山”とあるが、それでは道筋が実際と一致しないので、多分羽黒山だつたのであろう。

わずかに“おぼれ谷”という所に宿があっただけであつた。福岡では夜になつて勤善寺の森へ行つて糖蜜の夜間採集も行つた。帰りには奥羽街道を上つて、石川は途中で下総の関宿から川蒸気に便乗し、江戸川を下つて、両国へ戻つた。

東京へ歸つて見ると、出発前 Butler へ出した手紙の返事が来ていた。石川が写生して送つた蝶の画は見事に出来ていて、Butler はそれによつて新種と認め、その翌年これを *Neptis excellens* と名付けて記載した (Cist. ent. 2: 282, 1878)。この名は今日もミスジチョウの名として使われている。種名の *excellens* というのは写生図が優れていたからである。後に“実物を見ずに画だけで新種を書くのは怪しからん”と Elwes が攻撃した問題の種である (Proc. zool. Soc. London 1881: 895)。“図が優秀であるか否かは科学的にはそれが実物とよく一致しているか否かによつてきまるので、実物を見ずにそんなことが解る筈がない”といつているのは尤もなことである。Elwes の見たときは British Museum にはその図を type としてあつた由であるが、今は別に“type”という標本が残っている。これは後に採集されたものであろう。



is, also to any of my former
who remember me.
it now conclude, as I have
the end of my sheet & of my
of my spare time.
I remain, your old friend,
butterfly hunter. W.A. Fenton

第4図 Fenton の筆蹟

Fenton の次の大旅行は北海道遠征であつた。明治11年の夏である。蝦夷が北海道と改名されても、その頃はまだ蝦夷の名を使う人が多かつた。ペルリの黒船がやつて来てまだ25年しかたつていない、その頃の東京と北海道との交通は船によるのが便利だつた。1878年7月13日の夕方に Fenton は石川と共に横浜を出帆して蝦夷地へ向つた。この船にはこの年の4月に東京大学の最初の動物学の教授としてアメリカから招かれた **Edward Sylvester Morse** (18. VI. 1838—20. XII. 1925) が同じく東京大学最初の植物学教授の矢田部良吉と共に乗船していて、やはり北海道へ研究旅行に向つたのである。“海はこのほか静穏であつて、航海は愉快なものであるべきだつたが、この汽船は前航海、船一杯に魚と魚の肥料とを積んでいたの、その悪臭たるや、実にどうも堪えきれぬ程であつた。船中何一つ悪臭のしみ込まぬものはなく、舳のとつぱしにいて、はじめて悪臭から逃れることが出来た。この臭気が軽い船量で余程強められたのだから、航海はたしかに有難から

ぬものとなつた。”⁹⁾石川が船中で苦しんでいるとき Morse からブランデーを飲めと言われ、まだ酒の味を知らなかつた石川も、それで大變気持よくなつたと述懐している。途中陸前荻の浜に寄港して、函館に着いたのは7月16日未明であつた。

函館では Fenton と石川は先ず Blakiston をたずね（彼のことは次節に述べるであろう）、そこでお茶を御馳走になつた。ここへ着いてからは Morse の一行とは別行動で、2人は毎日函館山へ登つて採集を始めた。数日してから採集旅行に出発、まず少し北の七飯で数日を過した。ここで石川はモントガリバの静止しているのが鳥糞に似ているのに注目し、またこれを捕えようとする、草の根元へ転がり落ちるのを観察し、後にこのことを擬態の好例として英字新聞に発表した。¹⁰⁾七飯から蕁菜沼(じゅんさいぬま)へ行つたが、ここで Fenton が飯屋の悪いおやじに撲られる椿事があつた。次いで森で一泊し、駒が岳に登つた。このときはアイヌを案内に雇つて行つたが、途中で新しい熔岩の谷が出来ている所へ来て、アイヌは“ここは渡れないから、ずつと下の方を廻り道する”と言つて下りて行つて了つた。Fenton は“そんな馬鹿なことは御免だ”といつて熔岩の谷を渡り始めた、ここで2人は迂り落ちて方々に擦り傷を作り、向う側へ上るときは非常に困難をして一歩一歩足場を作りながらやつとどり着いたときにはアイヌはずつと前からそこへ来て待つていて、2人の苦勞するのを笑つて眺めていた。駒が岳で石川はモウセンゴケの群落を発見し、驚喜して観察した。

森からは船で室蘭へ渡つたが、これは殆ど丸一日かかつた。室蘭で4~5日採集して、登別、白老へ行き、アイヌ部落を見学し、苫小牧(とまこまい)に出た。Fenton 等は毎日午後3時頃に宿に着いて採集品を整理する慣例であつたが、苫小牧で宿に着いて、室にアルコール瓶などを並べて整理をしていると、怪しげな若い女がぞろぞろ入つて来たので、驚いてわけを聞いて見ると、それはその日にそこへ来ることになつて来た娼婦の検査医と間違えられたのであつた。この辺は当時はまだ熊の出没する地域であつた。苫小牧から石狩へ抜けて札幌につき、ここでは Fenton は外人の家に宿泊した。札幌からは銭函まで行つて2泊し、小樽から岩内に出で、山越しで黒松内を経由、長万部から海岸沿いに函館へ戻つた。この旅行には約1箇月かかつた。

当時北海道の山中は道路は狭く、熊の危険もあつて原始林に立入ることは殆んど出来なかつた。また2人は至る所、吸血双翅類の襲撃に悩まされ、殆んどそれを追払う以外に何も出来ないことさえあつた。Fenton の記す所によるとメクラアブ2種、アブ3種、ブユ1種があり、またダニにも悩まされ、あるときは一度に20疋も脚に食いつかれた。また苫小牧から島松(膽振)へ行く間で、ツバメシジミの大群に出会つた。何千というこの蝶が地面に止つて水を吸つている壯観は、小さなヨットの艦隊のように見えた。網の一擲いで106頭も入つた。

この北海道旅行は昆虫学の探検としては北海道最初のものと言つてよく、このとき採集

9) Morse, Japan Day by Day (石川欣一訳、日本その日その日、1: 501) による。

10) Cases of mimicry among Japanese Lepidoptera, Tokio Times, 1878. (未だ見る機を得ない。)

された蝶の種類は74種であつた。その中で Fenton 自身及び Butler によつて新種として記載されたものは *Erebia scoparia* Butler (ベニヒカゲ, 黒松内), *Araschnia obscura* Fenton (サカハチチョウ), *Vanessa lunigera* Butler (シータテハ, 膽振), *Vanessa connexa* Butler (ヒメヒオドシ, 渡島), *Lycaena pseudaeagon* Butler (シジミチョウ, 膽振), *Lycaena iburiensis* Butler (イシダシジミ, 膽振), *Thecla butleri* Fenton (ウスイロオナガシジミ, 函館), *Thecla regina* Butler (ミドリシジミ, 渡島, 膽振), *Thecla signata* Butler (ウラミスジシジミ, 黒松内), *Strymon fentoni* Butler (カラスシジミ, 後志), *Leptosia morsei* Fenton (エゾヒメシロチョウ, 膽振), *Papilio dehaani*, var. *tutanus* Fenton (ミヤマカラスアゲハ, 渡島, 膽振) の12種に達した。これらの名は今日ほとんど全部が独立種または亜種名として残っている。

なおこのとき採集された蝶で、最近まで見落されていた重要なものが一つある。このことは既に前に記したが (昆蟲 23 : 38, 1955), それは彼が目録の中で “45. *Scolitantides sedi* Fabr.” という名で記録したもので (Proc. zool. Soc. London 1881 : 849), これこそは後のジョウザンシジミ (*orion* Pallas) であつたことは毫も疑ない。

帰途は函館から青森へ渡つて陸行して帰つたらしい。石川は途中陸奥福岡で、再び田中館の家に客となり、しばらく滞在してから東京へ帰つた。

Fenton の採集品について一部は自身により、一部は Butler によつて、上述の新種が発表されたが (Proc. zool. Soc. London 1881 : 846—856), 石川も帰つてからは北海道と本州の同種または近似種間の変異について研究し、Morse の紹介によつてそれを *Papilio* 誌上に発表した。¹¹⁾ またこの時の旅行談と観察を東京大学生物学会の翌明治12年3月2日の会合で講演した。上記の石川の論文はこの講演の内容の中サカハチチョウ、ヒメシロチョウ、ヒョウモンチョウ、ミヤマカラスアゲハについて特に翅形の変異について記述し、図示している。附図は手彫の木口木版の図版である。上記 *Papilio* はアメリカの New York Entomological Club の機関誌で、純鱗翅類だけの雑誌であつた。石川は Morse の紹介で、その主宰者であつた Henry Edwards (27. VIII. 1830—9. VI. 1891) と文通し、標本の交換をしたりしていた。Edwards は London に生れ、俳優として一家をなし、1853年オーストラリアへ、1865年 California, 1878年 Boston, 1879年 New York へと移り住み、その間に各地で本職の傍ら昆虫を集め、New York Entomological Club の創立者、*Papilio* の編輯者であつた。彼の標本は当時アメリカ最大の蝶蛾の蒐集品と言われ、死後は New York のアメリカ博物館 (American Museum of Natural History) に入っている。

Fenton は間もなく明治13年帰国し、Cambridge のある私立学校で動物学を教授していた。帰国して後論文を書いたものなく、またその生死の日附なども不明であるが、石川や田中館は彼の帰国後も文通を続けていたようである。私の手許にも Fenton から石川宛の1883年10月18日附の手紙がある、これは蝶の同定についての詳しい通信である。両者はお互の標本に共通の番号をつけて、同定上の連絡をしていた。

石川は Fenton の帰国するころは東京大学の生徒で、動物学を専攻していた。彼の採集

11) Notes on variations in some Japanese Lepidoptera, *Papilio* 2: 35—37, 1882.

した蝶は Fenton の助けによつて同定を企てたが、北海道の採集品などには名称の不明なものがあつた。明治 15 年 (1832) 年に東京大学理学部 (神田一ツ橋) の中に博物館が完成し、その時数冊の動物標本の目録が作られている。その中の 1 冊は鱗翅目のもので、その標題は：

Zoological Collection | Catalogue of Lepidoptera classified according to M. A. Fenton | Science Museum, Department of Science, University of Tokio, 1882

となつていて、本文 12 頁、この中に蝶類 101 種、蛾類 42 種が登録されている。標本数は 1~6 頭で、多くは 1 頭或は 2 頭である。蛾類が非常に少いのはあまり採集もせず、また名も解らなかつたためであろう。蝶の中には東京の外に北海道(七飯), 陸奥(福岡), 岩代, 下野などのものが多く、石川が Fenton に同行して集めた標本が主体をなしていたことは疑なく、またその同定や、目録の編纂も石川が受持つたものであろう。

Fenton の北海道採集品は彼自身及び Butler によつて研究され、1881 年に発表されたことは上記の通りであるが、その後、恐らく 1882 年頃に作られた日本の蝶の目録が残っている。これは foolscap 型の洋紙の片面に印刷され、7 葉からなる。採録されたものは全部で 141 種で、もちろん学名だけしか記されていないが、これは石川が Fenton の助けを得て、或は両氏の共編で作られたものであることは確実で、私の手許にあるもの一つには石川の手記で産地などが書き加えられている。この中には 1881 年に Butler や Fenton の記載したものが採録されているが、1883 年に出た Pryer の有名な日本鱗翅類目録 (後節に詳しく述べるであろう) の中に記録されたものは載っていないので、上記の通り 1882 年頃のものとして推定するのである。もちろんこれは正規の出版物とは言い難いが、歴史的には注目すべきものであろう。

Fenton は帰国後は何も書かず、また研究も継続しなかつたようであるし、石川は明治 15 年大学を卒業すると共に動物学者として活躍し、次第に蝶の研究からは遠ざかつた。しかし、その後の日本昆蟲学の発展には 2 人とも大きな影響を与えた。

正 誤

本誌, vol. 23, no. 2 に登載の杉 繁郎氏論文 "On the genus *Chasminodes* Hampson, with descriptions of new species" 中に、下記のような重要な誤があるので、ここに訂正する。尚、この誤は原稿の誤記であることを附記する (編集幹事)。

頁	行	誤	正
79	上から 23 行目	fig. 7	fig. 6
80	下から 17 行目	fig. 3	fig. 7